



TITLE:

(隨想)我が教室の郷土色

AUTHOR(S):

石川, 昌義

CITATION:

石川, 昌義. (隨想)我が教室の郷土色. 泌尿器科紀要 1958, 4(12): 665-666

ISSUE DATE:

1958-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111698>

RIGHT:

泌尿器科紀要

第 4 卷 第 12 号

昭和 33 年 12 月

随 想

我が教室の郷土色

奈良医科大学教授 石 川 昌 義

聊か「話の泉」めいて申訳けないが、奈良医科大学の所在地は？と訊ねてみれば、世間一般の凡その人は奈良市と答えるに違いないと思うが、実は橿原市が其の所在地である。此の橿原市は一昨年町村合併で、其れ迄大学のあつた畝傍町と云う田舎町を中心に誕生した新市であり、従つて曾つては我々の大学は市に本拠を置かぬ唯一の医科大学であつた。

亦橿原市は大学より寧ろ橿原神宮を連想させる田園都市で、大和平野の略中心に在る。3階建の病院屋上に昇れば、大和平野を一望の内に収める事が出来る。よく耕された農地が病院の真際迄迫つて居り、殊に春などは色とりどりの平野の彼方に吉野連山、金剛、葛城、生駒、或は三笠の山々が遠く霞に包まれて望まれ、近くは香久山、畝傍山、耳成山の所謂大和三山が盆石を置いた様に眺められる。此の様な田園風景の中に大学が孤立して在るので騒音と云えば1時間3本の郊外電車の警笛ぐらいで、至極のんびりとして居り、或意味では恵まれた環境にあると思われる。しかし泌尿器科的疾患を対象とする我々には必しも恵まれた環境とは云い難かつた。と云うのは患者は主として周辺の農村、或は山間部から集つて来るのであるから、戦後驚異的進歩を遂げた泌尿器科の認識、或は理解に乏しいのも無理がなく、殊に泌尿器科学の独自性に就ての正しい理解は皆無と云つてよい程であつた。私が本学に就任したのは昭和21年であつたが、当時皮膚科泌尿器科は皮膚科性病科であると言う程度の認識しか彼等にはなく、我々が患者に手術の必要を説くと、“それは外科の先生にやつて貰うのですか？”と云う様な反問を受け、一再ならず苦笑させられた。亦次の様な笑話も生れて来る。それは67才の老婆の膀胱癌に膀胱全摘出術並に Coffey-Usadel 氏法を実施して、初めての手術としては満足するに足る結果を挙げ得たと自負して居た。ところが退院後遠隔成績を調査する為来院を求めてもやつて来ないので、医員を数回派遣したが其の都度門前払を受けた。不思議に思い、或る日強引に其の家族に面会を求めて其の訳を訊ねると、“人を片輪者にして置いて今更何を云うか。”と一喝されたので、医員は放々の態で帰つて来ると云う始末であつた。一般素人のこうした認識不足は致し方ないとしても、時に一般開業医の意外な認識不足に遭遇して驚かされた事がある。此の例は極端なものであるが、ストレプトマイシン、其の他の優秀な抗結核剤の未だ無かつた昭和22年頃の話である。某開業医から慢性膀胱炎として我々の処に送られて来た患者が、実は腎臓結核である事が解つた。それ故其の趣をその主治医に返事して、手術を奨めた。ところが其の患者が再びやつて来て云うには、あのお医者さんは“腎臓の様なもの取つてしまつたら命がない”と云うが如何したものでしょう、と相談に来ると云つた様な事があつた。しかし幸い其の患者は我々の説明に納得、手

術を受け再び健康を取り戻す事を得た。其の後、其の患者と時折通勤途上で遇うが、其の都度彼から感謝せられ内心微笑を禁じ得なかつた。

奈良県では県医師会名簿を一覧しても、皮膚科泌尿器科のみを専門として居る開業医は、僅か数人に過ぎない。しかもそれらの人達は実際には皮膚科に寧ろ重点を置いて居る現状である。尤も戦前は我国でも泌尿器科教室の独立した大学は少く、一般に皮膚科泌尿器科と云えば皮膚科により重点をおく傾向にあつた様に思われる。戦後多くの大学に於て泌尿器科教室の独立を見る様になつたが、此の地方では今にして皮膚科の附属物位にしか考えられていない。云わば、当地方は泌尿器科医にとつて全くの処女地とも云い得る訳で、前記の様ながつかりさせられる事も多かつたのである。併し此の頃では、次の様な愉快的挿話にも度々遭遇する。例えば数年来、我々は前立腺腫瘍患者に Millin 氏法、或は其の変法を採用、手術を行つて居るが、2、3年前から前立腺腫瘍患者の来院が急激に増加した。此れは前立腺腫瘍が我国に於ても一般に老人病の一つとして重要視せられる様になつて来た風潮に依る為とも考えられるが、我々の処では別に一つの原因がある様である。それは我々のクリニックで手術を受けて退院した患者達が同病相憐んで、自分の体験を吹聴して廻つたり、或は我々の所で手術を命ぜられた患者は伝手を求めて此等の人々から其の体験を詳細に互つて聞かされてから入院手術を受けると云う訳で、退院患者は私設宣伝局並に興信所となつて貢献してくれる為と考えられる。他の手術の場合も同様で、手術となると従来はよく大阪、京都の大学或は著明病院を一応廻つて来てから、我々の所で手術を受けると云う順序であつたが、近来は手近な所に宣伝局並に興信所があるので、之の手間が必要でなくなり、手早く入院する様になつた。

私は現在大学から電車で30分ぐらいの県下の田舎町の生家から通つて居る。電車は1時間に2本しかないが、それを利用しての勤務の途上、車内並に車外の風景が、此処数年来著しく変つて来て居る様に思われる。それは数年来の豊作に依る農村景気や農村合理化の為と考えられる。農家の屋根にテレビのアンテナが処々に見られるし、農繁期には新しい農器具が勇ましい音を立てながら楽しそうに操作されて居るのが車窓から眺められる。車内では電気洗濯器とか、其の他の文化家庭器具に就いて取り交される会話を耳にする機会が多くなつた。即ち我々の眼にそれ迄10年1日の如く労苦を嘗み進歩と云う事が殆んど認められなかつた様に見えて居た農家の日常も、人工肥料、農薬或は電気機具等の進歩に伴つて、旧来の封建的な労苦から或る程度開放せられて来て居る実状が良く覗かれるのである。

齟つて泌尿器科手術に就て省ると、何か上述の事実と相通ずる点が多い様に思われる。私が大学を卒業した時分、即ち昭和9年頃は術前術後の輸液にしても暗中模索的であつたり、或る時は術後の感染に悩み、或る時は麻酔の不調に患者と共に苦しんだ事を思い起す。ところが戦後諸検査法の進歩、諸種抗生物質並に内分泌剤の発見、輸液、麻酔を中心とした手術管理の発達に基礎を於いて、泌尿器科手術が其の安全性を増し、我々は旧来の労苦から或程度開放せられたからである。

泌尿器科的に処女地であつた此の地方で、或る意味では我々は開拓者的役割を嘗んで来、また現に嘗みつつあると自惚れて居る。しかし此の間手術管理の實際を早くから米国で充分研究せられて来た恩地裕教授の協力で、其の合理化の恩恵に早くから浴し得た事は何んと云つても幸な事であつたと思つている。